〈研究ノート〉

サンクト・ペテルブルグ（ロシア）における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ

ヴィクター・ルィービン

はじめに

ロシアという国はヨーロッパにある国家であり、今はユーラシアの北半分を占める連邦国家である。古代ロシア年代記に基づいて一八二五年までにN・カラムジーン（Николай Карамзин/Nikolai Karamzin）によって書かれた『ロシア国家史』によると、ロシアには八六四年から君主制が導入された。当時、ノヴゴロードのスラヴ人、キリヴィチ人（Кривичи/Krivichi）などの少数民族を代表した使節団がスカンディナヴィアへ派遣された。彼ら（スラヴ人）の国々での秩序維持と支配を求めてヴァリャーグ人の公たちをノヴゴロードその他の小公国に来るように招致したのである。八六二年に、スカンディナヴィアの軍団と共に三人の首長の兄弟のうち、長兄のリューリク（Рюрик/Ryurik）はノヴゴロード公国へ、弟のシネウース（Синеус/Sineus）はベロオーロ（Белоозеро/Beloozero）公国へ、同じくトルヴォール（Труvор/Truvor）はイズボールスク（Изборск/Izborsk）公国へと到着した。この兄弟三人の支配下にあった小公国はまとめてルーシと呼ばれるようになった。二年後の八六四年、リューリクは弟二人の没後の公国の支配者にもなり、首都もノヴゴロードに移された。さらにその後首都はキエフに移され、一〇世紀（九八九年）にキエフ公国が栄え始めた頃、その大公ウラジーミルはルーシ（ロシアの旧名）のキリスト教（ギリシア正教）への改宗に尽力したといわれる。

一三世紀から約二〇〇年にわたってモンゴル族に征服されたが、ロシア人は激しい戦いを繰り返した末、ようやくその頸木から脱した。その後にモスクワ（モスコーヴィア）大公国が出現した。

一五世紀から一六世紀にかけてロシアは中央集権国家として発展し始めた。当時のイワン三世（一四四〇―一五〇五　在位一四六二―一五〇五）は国土を統一して、全ロシアの君主すなわち全ロシア大公と称されるようになった。イワン四世（一五三〇―八四　在位一五三三―八四、一五四七年からツァーリ〈皇帝、大王〉の称号を採用した）は大貴族たちの間に恐怖政治を引き起こしつつロシア領土の拡張を推し進め、ウラル山脈を越えて西シベリアまで進出し、「雷帝」の名を世界史に残した。

一七世紀初頭、ロマノフ王朝の時代に入ってから、「東シベリアへの発展はめざましく、一六五〇年代には、はやくもオホーツク海、太平洋までに達した」[1]。

ロシアの大工の皇帝と日本の水夫との出会い

このようにロシアは交易を拡大し、植民政策を推進した結果、その領土をカムチャツカとチュコト両半島にまで拡張できた。こうした国策の遂行に積極的に参加協力したのは冒険心のある商人、探検家などであった。その中の一人で、ロ・日関係の歴史に名を留めた人物が、ウラジーミル・アトラーソフ（Владимир Атласов/Vladimir Atlasov ?―一七一七）である。

コサックの五〇人隊長アトラーソフは初めてカムチャツカ探検を行い、その半島南部のカムチャダール人部落を制圧した。その折に、イチャ湖畔に漂着して滞在していた〝ギリシア人のような囚人〟の消息を伝え聞いて彼を訪ね、約二年間カムチャツカで生活を共にする。この〝ギリシア人のような囚人〟は、名をデンベイ（伝兵衛）とされ、アトラーソフがロシア北東部にあるヤクーツク庁（現在サハ共和国の首都）に送った報告書には「ウザカ〔大坂〕国の者である。この国はIndo（江戸）の支配下にある」[2]と記されている。

この期間にロシア語を修得したデンベイを、アトラーソフは当時の首都モスクワに連れて行った[3]。デンベイはシベリアを経由して一七〇一年一二月の末頃、モスクワに到着した。ピョートル一世（大帝 Пётр I Алексеевич/Pyotr I Alekseevich 一六七二―一七二五　在位・ツァーリ一六八二―一七二〇／皇帝一七二〇―二五）は翌一七〇二年一月八日、「漂着した日本の水夫」にモスクワ郊外のプレオブラジェンスコエ村で謁見を許可した。彼はある程度のロシア語を修得していたデンベイから、日本のことを詳しく聞いていたといわれる。

ピョートルは一六九七年から九八年にかけ、身分を隠してドイツ、オランダ、イギリス、オーストリアなどの西欧諸国を旅行し、ヨーロッパ文明の体験・摂取に努めた。このとき彼は自ら希望して、実際にさまざまな職業を経験する。造船所の大工になって船造りを覚

えたりしたことから、帰国後に〝大工の皇帝〟の異名が付いた。ピョートルはあるいはオランダ滞在中に、すでにジパング（日本、Zipangu）についての予備知識を得ていたかもしれない。

水夫デンベイには、ロシア皇帝に謁見する前に日本への帰国が約束されていたかのような資料が残っているが、もし本当に約束されていたとしても、デンベイの帰国への期待は外された。

ピョートルは、西はバルト海沿岸まで、また南はトルコとクリミヤで戦って、一六九六年にアゾフ城下町（現在、ロシア共和国南西部、ロストフ州のドン川に臨む河港都市）を征服した結果、アゾフ海（黒海北方の内海、ケルチ海峡で黒海と結ばれている）の沿岸までロシア領土を拡張した。いわゆる「ヨーロッパへの窓」となる新首都ペテルブルグ（港町であり、城下町である）の建設を完成したあと、さらに東方への進出を目指したことはいうまでもない。アジア大陸の東の端にある日本との交易を望み、この地に達する海路を探索したであろう。また、このような野望を達成するためには、日本語ができる人材も必要であることをよく承知していたと思われる。ゆえに、デンベイへのロシア語教育を強化するように命じ、一七〇三年にはペテルブルグに移住させて日本語教師の称号を与え、一七〇五年には航海数学学校内にロシア最初の日本語学級を開かせた。[4]

ロシア人の最初の日本語学習経験

最初の日本語の学習者は、兵士出身のわずか三、四人であった。学習の第一段階での成果はさして悪くなかったようだが、弟子たちの外国語修得の能力が不十分であったせいか、先へ進むほど成績は上がらなくなった。日本語教育を奨励するためか、教鞭をとってから一年後にデンベイの報酬は、皇帝の命により倍増されたと伝えられている。

デンベイは一七一〇年、ギリシア正教の洗礼を受けてガヴリールと名乗った。日本人最初のギリシア正教徒である。ロシアに帰化したデンベイには、もはや帰国のチャンスは全く失われた。

日本語の教師は数年間にわたりデンベイただ一人であったので、彼がいなくなれば日本語教育が中断するおそれがあった。ロシア当局は予測される事態への対策として、東方を担当するヤクーツク庁に「いま一人の日本漂民を送れ」という命令を出した。[5]

デンベイの次に新都ペテルブルグへ送られてきた日本人はサニマという人物だった。その発音は三右衛門（?）に由来するものであろう。彼は「一七〇九年冬に遭難し、一七一〇年にカムチャツカのアワチャ湾北方に漂着した〈中略〉一七一四年にペテルブルグに送られてデンベイの助手になり〈中略〉後に帰化してロシア婦人と結婚し一七三四年に没するまで日本語を教えていた」。[6]

サニマとロシア女性との間に生まれた息子は名をアンドレイ（Андрей/Andrei）、姓をボグダーノフ（Богданов/Bogdanov）と命名

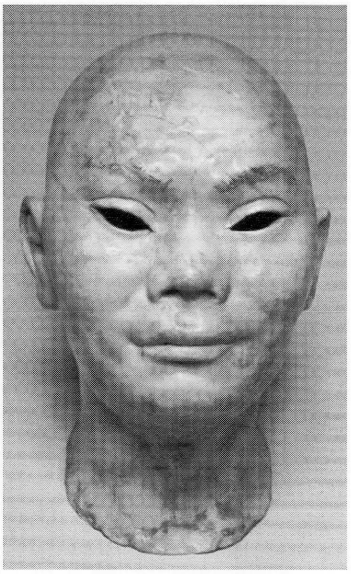

図1　ゴンザの首像

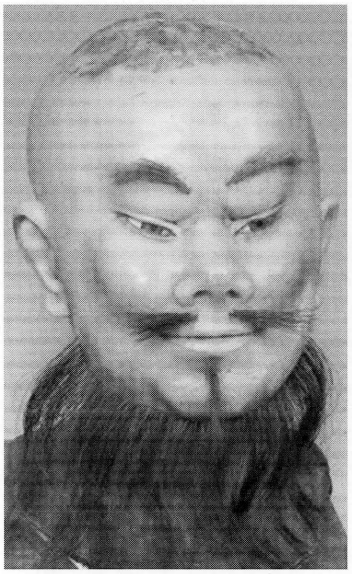

図2　ソーザの首像

カ半島のロパトカ岬とアワチャ湾の周辺に現れた。彼らは薩摩から大坂へ向かった二隻の貨物船の乗組員たちであった。出港してから強風のために航路から逸れ、半年以上も海上を漂流したあげく、ようやく海岸に漂着したものの、その後さらに不幸が重なり最後に生き残った二人だけとなった。一説には、一五人の船員がコサックの五〇人隊長シュティーンニコフに殺されたとされ[7]、また他の説では、「この船の乗組員たちの場合は、不運にも上陸後、コサックのシュティーンニコフの率いるカムチャダール人一行から掠奪に遭い、大人のソーザと一一歳のゴンザの二人を除く一五人の乗組員が殺害されました[8]」とされる。

このような悲惨な虐殺事件は、ロ・日関係史の初期の当時としては例外的な出来事であった。首謀者シュティーンニコフは法廷で有罪と判定され、死刑の宣告を受けた。

ソーザとゴンザの二人は、一七三三年夏、首都ペテルブルグに送られ、王室の離宮である夏の宮殿で、当時のロシア女帝アンナ・イオアーノヴナ（Анна Иоанновна/Anna Ioannovna 一六九三―一七四〇、在位一七三〇―四〇 ピョートル大帝の姪）に謁見した。こののちゴンザ、ソーザともにギリシア正教の洗礼を受け、前者はデミアン・ポモールツェフ（Демьян Поморцев/Demian Pomortsev）、後者はコジマー・シュールツ（КозьмаШульц/Kozma Shults）と名付けられた。ロシア語をマスターした彼等は一七三五年、ギリシア正教の教理を

された。後にこのA・ボグダーノフは日本語学級の生徒の中心となり、親子ともどもロシアでの日本語学習の発展に尽力することになる。

ロシア初の日本語学校

一七二九年の夏、新たに一七人の日本の漂流難民が、カムチャツ

修めるためにペテルブルグにある有名なアレクサンドル・ネフスキー修道院に通っていたといわれる。

一七三六年、ソーザとゴンザは科学アカデミーに付設された日本語学校の教師に就任し指導を始めたが、年長のソーザは、この年四〇歳くらいの若さで没した。一方カムチャツカに漂着してから七年にわたる年月を経て、一八歳になったばかりのゴンザは不案内な当地で教鞭をとる傍ら、アカデミー図書館館員であったアンドレイ・ボグダーノフ（サニマの息子）の指導を受けて、わずか三年の間に日本語会話入門、露日単語集、簡略日本文法、新スラヴ日本語辞典、友好会話手本集などを編纂している。一七三九年一二月、ゴンザは二一歳の若さで世を去った。[9] ロシア科学アカデミーは、ソーザとゴンザがロシアに滞在して日本語教師として活躍したことを記念し、二人の首像を作らせた。今日、サンクト・ペテルブルグの人類学・民俗学博物館にこれらの像が保存されている。

日本語学校での授業を続けたのは、A・ボグダーノフと、この学校の最初の卒業生であったピョートル・シェナヌィーキン（Петр Шенаныкин/Peter Shenanykin）とアンドレイ・フェニョフ（Андрей Фенёв/Andrei Fenyov）である。すなわちゴンザの没後、日本語を母語とする話者（ネイティブ・スピーカー）が数年のあいだ姿を消したわけであるが、一七四六年この学校を活気づけるために新たに五人の日本人がサンクト・ペテルブルグに送られてきた。前年に千島列島のオンネコタン島に漂着して、毛皮青税を集めに来ていたロシア人の一行に救出された一〇人のうちの五人であった。彼らは、サンクト・ペテルブルグの学校が一七五四年にイルクーツクの航海学校内の学科として移転するまで日本語の教師として活躍していた。一七五三年末までサンクト・ペテルブルグで日本語を教えたのはスヴィーニイン（Свиньин/Svin'in ショエモン）、ヴァシーリ・パノーフ（Василий Панов/Vasilii Panov イヘイ）、チョウールヌイ（Чёрный/Chornyi キュタロ）であり、その前にレシェートニコフ（Решетников/Reshetnikov ヒチベイ）とレーベヂェフ（Лебедев/Lebedev イソジ）の二人がすでに亡くなっていた。

ロシアにおける初期の日本語学校は、もとよりその目的や役割が明確に規定されているわけではなかった。それでもこの日本語の学習活動は世界史上でもきわめてユニークな社会現象であったといえよう。そのユニークさは、鎖国政策を取っていた日本ではロシアのことはほとんど知られていなかったにもかかわらず、隣国とはいえ遠い異国の地で一七〇五年からすでに日本語の教育課程が作られていたことにある。この点では、ヨーロッパ全域を眺めても、類のない現象であったといってもいい。

イルクーツクの日本語学校は、サンクト・ペテルブルグからの「継承」校として、一七五四年から一八一六年まで日本語教育を続けていた。イルクーツクの日本語学校は、これが閉じられた時、ロ

シアにおける日本語の教育・学習の歴史も一時中断したが、後年、大学で日本語教育が発足するまでの先駆けとしての役目を果たしたのである。

大学での日本語教育

サンクト・ペテルブルグ帝国大学では、一八七〇年から日本語を選択科目として教え始めた。そのきっかけとなったのは、当時外務省のアジア局長であったストレムーロフ（П.Н. Стремулов/P.N. Stremulov）の指示によるものであった。そのアジア局の下級官吏・通訳官の橘耕斎（一八二〇―八五）が日本語を教えたいとの希望を局長の助手に伝えたのを受けたのである。

橘耕斎がロシア人に初めて接したのは、伊豆半島の戸田村であった。ペリーと前後して日本に来航したプチャーチン使節団は、日露和親条約（二〇〇五年は調印一五〇周年にあたる）を締結するのに成功したものの、乗艦ディアナ号を津波で失ったため、戸田で代わりの船を建造していた。このとき耕斎は、中国語通訳ヨシフ・ゴシケーヴィチ（Иосиф Гошкевич/Iosif Goshkevich）をはじめ使節団の士官たちと知り合って、一八五五年の夏、ロシアの水兵たちに紛れて日本を密出国した。ロシア外務省のアジア局に勤務し始めた耕斎はまもなくギリシア正教に改宗し、洗礼名をヤマートフ（大和夫）と名乗った。一八五七年にサンクト・ペテルブルグで出版されたゴシケーヴィチの和露辞典（『和魯通言比考』）の編纂にあたってヤマートフが大きな貢献をしたのである。「この辞典の見出し語数は一八〇〇〇を上回り、日本語とロシア語の最初の本格的なバイリンガルの辞書として学術的意義はきわめて大きい[10]」。ゴシケーヴィチは、この業績に対して一八五八年に当時ロシアにおいて権威のあるデミードフ賞を授けられている。耕斎自身は、一八年あまりロシアに滞在したけれども、ロシア語はそれほど達者ではなかったという。彼は一八七〇年の秋から日本へ帰国する七四年まで東洋学部の中国語・満州語・モンゴル語科の三一四年生に週二回の講義を行っている。帰国後、僧になるため剃髪して増田甲斎と名乗り世捨て人となった。

橘耕斎の帰国後、日本語教育は、在サンクト・ペテルブルグ日本外交使節団の役人の一人、西徳二郎（一八四七―一九一二）が受け継いだ。ロシアに留学しペテルブルグ大学で学んだ西は、すぐれた教養人であり、ロシア語も巧みであったといわれ、帰国するまでの二年間（一八七四―七六）、東洋学部で日本語を教えた。帰国後、太政官、大書記官などを歴任、外相と在中国公使も務めた[11]。

このようにしてサンクト・ペテルブルグでの日本語教育は、リレー形式で続いていく。明治・大正期の官僚・政治家であった安藤謙介（一八五四―一九二四）は、東京のニコライ露語学校と東京露語学校でロシア語を学び、外務省に出仕した。一八七八年から在サン

クト・ペテルブルグ日本公使館に書記一等見習として勤務していたが、一時解雇中にロシア外務省アジア局の推薦で八一年から日本語教師に任命され、給与を大学から受けていた。しかし八三年に公使館に復職したことにより、双方から給与を受けることは禁止された。安藤が日本語授業の続行を望んだところ、在サンクト・ペテルブルグ日本公使と東洋学部との合意により、彼の要望は東洋学部での仕事は報酬なしの条件で許可された。[12][13]

安藤謙介が大学で、また公使館で活躍中に、皇帝アレクサンドル三世（一八四五―九四）を訪問するため、日本から有栖川宮熾仁親王（一八三五―九五）がペテルブルグを訪れた。一八八二年（明治一五）九月三日付ロシアの『政府官報』（«Правительственный Вестник»）という新聞は次のように報じた。「昨日、急行列車で日本の親王殿下、日本軍元帥、副首相有栖川宮はペテルブルグに到着なされた」と。有栖川宮は宮廷で謁見し、皇帝の離宮エルミタージュを訪問した。彼がサンクト・ペテルブルグ帝国大学を訪れたかどうかは判然としないが、学生が熱心に聴講する日本語講座のあることを知った宮は、自らの蔵書の中から三五〇〇冊にのぼる書物と写本を大学の図書館に寄贈した（いわゆる「有栖川文庫」）。

余談であるが、故バービンツェフ教授は、筆者の学生時代の一九七三年に行われた日本語科設立七五周年記念式典にあたっての講演会でも、その後に出版された論文にも有栖川宮のロシア訪問の目的について間違って「アレクサンドル三世の戴冠式に参加されるため」と推測している。[14] しかし、戴冠式はその前年の一八八一年三月一五日にモスクワのウスペーンスキ寺院で行われたため、その時の訪問は戴冠式と直接関係はなかったと思われる。したがって有栖川宮の訪問は単なる表敬訪問に過ぎなかったであろう。

ともあれ安藤は授業の傍ら宮から寄贈された古書と写本を整理して目録を作りはじめた。しかし一八八四年の秋に帰国したため、目録作りと東洋学部での日本語の授業は一時中断された。彼の帰国に際して、彼が大学のために無報酬で貢献したこと（日本語の授業や目録作成）が認められてスタニスラーヴ勲章（二等）が授けられた。[15]

七年ぶりに帰国した安藤謙介は、検事を経て富山、千葉の県知事に就任、一九〇三年（明治三六）衆議院議員に選出。のち愛媛、長崎、新潟の各県知事を歴任し、横浜、京都の市長をも務めた。[16]

一八八八年、東洋学部での日本語学習が新しい段階に入ったのは、その年から黒野義文（一八五九?―一九一七）が教壇に立ったことによる。黒野（ロシアでの名前はイオシフ・ニコラエヴィチ・クロノ）はニコライ露語学校から東京外国語学校に進み、卒業後、母校の助教授になった。一八八六年（明治一九）研究の目的でロシアに渡ったが、日本公使西徳二郎の推薦によりペテルブルグ大学の日本語教師に就任したのである。黒野の努力により学部での教育課程はよく均整の取れたプログラムに向上した。黒野には日本の古典の素養も

あったので、日本語の教育は勿論、書道などの授業も可能であった。彼の教育理念は知識の伝達を正確に行うことと、学生にとって実践的で有意義な教材を提示することにあったのであろう。黒野が作成した一〇点余りの教材は、学生の教育上大いに効果を挙げた。彼は「日露通俗会話篇」を著わし、またロシア人の日本語、日本文学、日本文化の学者を育成することに多大な貢献をした。[17][18][19]「橘耕斎がロシアの外務省勤務、そして西徳二郎、安藤謙介の両氏は日本の外務省勤務と、いずれも教師を本職とした人ではありませんでしたが、黒野義文は教師として通した人」であった。[20] ソ連科学アカデミー編の「日本関係文献目録―一七三四年から一九一七年までロシアで発刊された文献」第一巻には黒野の著作が数点あげられている。

三十余年をロシアで過ごした黒野は、結局帰国することなく一九一七年一二月に没した。同月二〇日、大学時代の同僚と東洋学部関係者によってサンクト・ペテルブルグ（当時レニングラード）近郊のトスノ市で葬儀が行われ、墓石が建てられた。[21]

サンクト・ペテルブルグ大学日本語科設立

この時期、東洋学部では学部内に日本語科を設立する必要性に関しての要請書を何度も政府へ提出していたが、財政上困難の理由をもって一向に実現には至らなかった。しかしついに元老院で東洋言語教育を充実発展させる決議案が採択されたのを受けて、文部大臣は一八九八年二月二五日、東洋学部内に日本語科を設立する方針を発表した。

日本語科開設にあたって、誰を初代科長に推すべきかが、学部当局にとって大きな課題となっていた。若手の学部卒業生エフゲーニ・スパーリヴィン（Евгений Спальвин/Evgenii Spal'vin 一八七二―一九三三）が博士課程に在籍し、学位論文を準備するために大学から二年のあいだ日本へ派遣されていた。しかし彼は日本に旅立って以来、結局東洋学部には戻らず、一八九九年に創立されたウラジオストック大学の招請を受けて、その日本語科の博士ポストに就いた。彼はその後著名な日本研究家になる。

次に一九〇三年、のちに日本語科の準教授となるヴォズネセンスキー（A.H. Вознесенский/A.N. Voznesenskii）が博士課程に進学した。彼もまた日本への派遣が決定していたが、日露戦争が始まったために実現に至らず、代わってベルリンとパリでの留学研究生となった。東洋学部は戦後になって再度、ヴォズネセンスキーを日本へ送ることを決定したが時遅く、本人は外務省での役職に指名されていた。[22]

二〇世紀初頭には、このように不安定な事態が頻発したが、この間ただ一人、変わりなく日本語教師であり続けたのは黒野義文であった。

一九〇七年から〇八年にかけては、一九〇〇年まで外務省官吏で

あったコースティレフ（В.Я. Костылев/V.Ia. Kostylev 一八四八―一九一八）が日本語を教えている。彼は一八七四年の卒業時ただちに母校の教師として招聘されたが応ぜず、一旦外務省に入って長崎で領事を務めていた。一九〇八年にコースティレフのロシア語訳で、一八七三年（明治六）に来日した英国の言語学者チェンバレン（B. H. Chamberlain）[23]の日本語文法に関する二冊の教科書が刊行された。また一九一四年にはロシアで最初の『ロ・日会話辞典』をサンクト・ペテルブルグで出版している。

一九〇八年、コースティレフは自ら願い出て大学の職を退いた。その後任にはドーリャ（Г.И. Доля/G.I. Dolya 一八七六―一九三一）が就いた。彼は一九〇五年にウラジオストック東洋大学を卒業、外務省に勤務しながら東洋学部でも一九一二年まで教壇に立ち、日本語学習入門、文法とテキストの読解、候文、漢文、福沢諭吉の作品の講読などの講義を担当していた。

ドーリャが去ったあと、中国語科の助教授で一九一三年から教授に就任したイワノフ（А.И. Иванов/A.I. Ivanov）が、日本語科の学生に日本語文法とテキスト、文語体、漢文、現代日本文学作品の講読とともに、四年の間に『万葉集』『古今集』『日本書紀』『竹取物語』『土佐日記』『日本外史』など日本文学・歴史の主要な古典をも学生に紹介するセミナーを開いていた。

当時、日本語の会話の分野は、それほど重要視されていなかったために、卒業試験にも「会話」は含まれていなかった。会話の実習を求める学生達は、実用東洋語学院（アカデミー）に通っていたといわれる。また、東洋学部の学生たちは夏休みには日本へ派遣されていた。このような日本への修学旅行は会話の実践の場として大いに効果があった。

当時、アカデミーの講師を務めていたのは、有名な東洋学者ポズドネーエフ（Д.М. Позднеев/D.M. Pozdneev 一八六五―一九三七）である。彼は一八九九年にウラジオストックに開設された極東東洋大学学長にも一九〇四年から〇五年にかけて就任している。彼の執筆による『ヨーロッパ文学作品における日本の現在と未来の見方』（サンクト・ペテルブルグ　一八九六年）／『日本―地理的概念』（ウラジオストック　一九〇六年）／ロシア最初の『ロ・日漢字辞典』（東京一九〇八年）／『日本語会話の文法』（サンクト・ペテルブルグ　一九一一年）／『日本―国、人口、歴史、政治』（モスクワ　一九二五年）等の図書が出版された。しかし彼は一九三七年に逮捕され、死刑に処された。[24]

サンクト・ペテルブルグ、ペトログラード、レニングラードでの日本学派の誕生

二〇世紀の初頭、日本語科に数人の有能な青年が入学してきた。彼らが、後にロシアが誇る日本学派の草分け的存在となり、今日の

サンクト・ペテルブルグにおける日本学の基礎を築いた人々である。前述のように、日本語科で教師が〝輪番〟で教壇に立っていた時期の一九〇八年、コンラッド（Н.И. Конрад/N.I. Konrad 一八九一―一九七〇）が日本語・中国語科に入学した。彼が現在のラトヴィア（バルト海沿岸にある国）の首都リガ市の中学（日本の高等学校にあたる）を卒業して、ロシア帝国大学に入学するためにペテルブルグに現れたのはごく自然な成り行きであったろう。一二年、彼は大学を卒業すると同時に実用東洋語学院（アカデミー）も卒業した。その直後からの日本での一年間の留学を終え、キエフ商業学校の助教授として中国語と日本語を教えた。一四年にペテルブルグに戻り同年、朝鮮と日本に派遣された。一七年七月帰国して東洋学部の教授に就任した。ロシアの歴史はもちろんのこと、ロシアの日本研究者たちの命運に激変をもたらした一〇月社会主義革命勃発の四ヵ月前であった。

同年冬、コンラッドは修士試験に合格した。しかしペテルブルグ大学の教師ではなく、オリョウール市に新設された大学の学長に任命され、ここに二二年まで在任した。同年秋の新学期から彼はペトログラード（前ペテルブルグ）大学に戻り、日本語および日本文学の講座担当者となった。都市の名前は時代と共にサンクト・ペテルブルグからペテログラード、さらにレニングラードに変わった。コンラッドはそのレニングラード大学で三八年まで勤務し、その間の三四年にはソビエトで初めての日本学の文学博士の学位を得て、科学アカデミー準会員に選ばれた。三年も経たないうちにソ連の国内政治状況は激化の一途をたどり、彼の運命にも大きな変化が生じた。

一九三七―三九年は内務人民委員・国家政治保安部長官エジョーフ（Н.И. Ежов/N.I. Ezhov）がスターリンのもとで大粛清・弾圧を行った時代であった。当時、スターリンの政治・政策に反抗した者はもちろん、同意しなかった者、熱狂的に支持しなかった者ですら誰彼の区別なく非国民の烙印を押されて逮捕され、残酷な拷問にかけられたり、死刑囚の収容所同然のいわゆるラーゲリに収容されたりした。多くの場合〝犯人〟には死刑が言い渡された。逮捕現場で即時刑を執行されたケースも少なくなかった。

コンラッドが逮捕の悲運に見舞われたのは一九三八年七月二九日である。彼が告訴されたのは〝日本のスパイ〟との容疑がかけられたためとされる。当時、とくに外国へ行ったことのある人物や、外国語の知識のある人物は社会主義国家ソビエトに忠実な国民ではない、と保安部のスタッフに疑われることが多かった。コンラッドも例外ではなかった。釈放されたのは四一年九月八日である。同年モスクワに移住してモスクワ大学に転勤した。五八年にアカデミー正会員になって、ソビエトにおける東洋学および日本学の最高権威と

して日本研究に多大の貢献を果たし、多くの後継者を養成した。

彼は、日本の文学作品『方丈記』『伊勢物語』などの翻訳に尽力して、ロシア語の訳書を数々生み出した。科学アカデミーの研究者としても活躍し、日本文学、日本語や日本史だけでなく中国古典文学、朝鮮語と民俗学などの研究分野においても優れた業績を残した。日本政府から六九年に勲二等旭日重光章を贈られた。『日露大辞典』の編集責任者として七〇年にレーニン賞が与えられた。同年九月三〇日死去。筆者とその同期生たちが東洋学部の新入生になった時であった。

コンラッド教授は、広い意味でロシアにおける日本文化の科学的研究の基礎を築き、日本学派の生みの親であった。彼の後継者の一人はニコライ・ネフスキー（Николай Невский/Nikolai Nevskii 一八九二―一九三八）である。ネフスキーは一八九二年二月六日ロシア中部にあるヤロスラヴィリで生まれた。一九〇九年ルイービンスク市の中学校を銀メダルで卒業後、ペテルブルグ大学東洋学部とペテルブルグ工科大学の両方に願書を同時に送った。どちらに入学するかで彼は悩んでいたという。ネフスキーの伝記作家グロムコフスカヤ（Л.Л. Громковская/L.L. Gromkovskaya）とクイチャーノフ（Е.И. Кычанов/E.I. Kychanov）によると、ネフスキーは子供の頃にルイービンスクに移住し、学校で習う外国語だけでなく町の周辺に住むタタール人やヴォルガ川の流域に分布する少数民族の言語や彼等の民間伝承などにも関心を寄せていた。[25] また少年ネフスキーは多趣味で鳩の飼育から写真撮影、踊りや詩の朗読も好んだ。加藤九祚が次のように書いている。「彼はルイービンスクに在住のタタール人と知り合い、その家に通ってタタール語の会話を習い始めた。また、彼の年長の知人で、モスクワにあるラザレフ東洋語専門学校のアラブ・ペルシア語科で学んでいたワーニャ・スロノフという人から影響を受けて、独学でアラビア文字を覚えた」[26]と。また技術分野にも関心をもち、永久機関の発明にチャレンジしたようなことも伝えられている。[27]

ネフスキーは、幼少時から貧しい環境で育ったためか、エキゾチックな言語や人文学の修得よりも、将来経済的に安定する職を選べるような専門的知識を身につけようと工科大学入学の方を選んだ。ところが一学年を終えて汽車の機関助手を体験した後、心中自らの真の望むところを問い直した結果、一九一〇年、工科大学を中退して、ペテルブルグ大学東洋学部の中国語・日本語科に入学し直した。一四年に大学を卒業後は大学職員となり、一五年春、二年間の予定で官費研修生として日本へ派遣された。同じ時期、東京に滞在していたのがコンラッドと、一〇年に大学を卒業したロゼンベルグ（Отто Розенберг/Otto Rozenberg 一八八八―一九一九）であった。

ロゼンベルグは、大学時代にサンスクリット語を専攻しながら選択科目としてV・Y・コースティレフ、G・I・ドーリャと黒野義文の

日本語の授業にも出席していた。東洋学部の教員として一二年から一六年まで日本へ派遣された。日本文学、日本仏教を研究した。帰国後、一七年から東洋学部の助教授就任、学位論文（Ph.D.）審査に合格し、一九年には日本の文学博士号を取得した。

ネフスキーは留学最初の時期に先輩のコンラッドとロゼンベルグと合流することができ、時には彼等と机を並べて研究するチャンスも得られた。ネフスキーにとっては実は二度目の日本との出合いであった。学生時代の一九一三年、わずか二ヵ月間ではあったが、「あこがれの国」の日本を旅行したことがある。長崎の宿屋で、大学で教えられた通りの日本語を話したところまったく通じなかった。神田喜一郎の思い出によると、時間を聞くのに『今いく時に候や』と言ったという。柳田国男もネフスキーの思い出話の中で、「皆きょとんとして返事をしなかったとか。あの時は情けなかったと後で私らに話していた」と書いている。その二ヵ月間、ネフスキーは東京に滞在して日本文学の研究に努めた。[28]

二度目の留学で彼は、帝国大学に通っていたコンラッドと共に本郷菊坂台上と本郷駒込林町に二人で女中一人と一戸を構えて暮らし始めた。ネフスキーはやがて柳田国男、折口信夫、金田一京助らと知り合う。柳田国男は『故郷七十年』の中で次のように書いている。

初めに私に紹介したのは折口信夫君と中山太郎君とであった。珍しいロシア人が来ておりますよというので、いつか連れて来ないかということになり、それからいつでも三人連れで来た。ただ喋っていてもと思い、輪講でもしようと私がいい出したところ偉いロシア人で、風土記をやりたいという。たしか『風土記逸文』をやったおぼえがある。（中略）月に二度くらい三人で来て、大分永い間続けた。

柳田国男とネフスキーは急速に親しくなり、一九一六年（大正五）二月、ネフスキーの二四歳の誕生日には、柳田の方から駒込林町の彼の家を訪れている。[29]

一九一七年にロシアでは社会主義革命が起こった。ネフスキーは二年の留学期間が過ぎても帰国しなかったために奨学金を打ち切られたが、運よく小樽の高等商業学校にロシア語教師の職があった。二二年四月、大阪外国語学校（現・大阪外語大）のロシア語講師として、入学した二五五人の学生に松永信成教授と共に露語部で授業を担当した。[30]同年、萬谷イソと結婚した。二九年七月退職して妻子を日本に残したまま単身帰国した。[31]三三年七月、イソ母子のソ連への渡航が許可された。

ネフスキーの研究領域は幅広く、日本の風土、アイヌ語と民間伝承（フォークロア）、宮古諸島のフォークロア、方言、西夏語（タングート語）など多岐の分野にわたっていた。多くの場合、彼の研究

はロシアだけでなく海外でもその分野において草分け的存在になっているといっても過言ではないだろう。スターリンによる粛清の嵐が吹き荒れる最中、非道にも、日本のスパイ容疑をもって妻と共に逮捕され、一九三八年一一月二四日射殺された[32]。妻イソも同日殺害された。一九五七年になって彼の名誉は回復され、六二年には西夏語の研究で没後レーニン賞が贈られた。

コンラッドがペテルブルグ大学東洋学部を卒業した一九一二年、文学・歴史学部でも優れた科学者の一人を輩出した。この人物は日本の知識人の間で「ポリ氏」とか「ポリ先生」として知られているポリワーノフ（Е.Д. Поливанов/E.D. Polivanov 一八九一―一九三七）である。

ポリワーノフは一八九一年二月二八日、スモレンスク市に生まれ、一九〇八年ペテルブルグ大学入学、在学中すでに言語の天才として評判が立っていた。一二年、比較言語学科の修士の頃、実用東洋語学院に通って日本語を学んでいた。一四年と一五年の二度にわたり日本に留学して方言の音声学的な研究を進めた。彼は日本語だけでなく中国語、朝鮮語、チベット語、およびヨーロッパの何ヵ国語をも習得した非凡な言語学者であった。すぐれた記憶力の持ち主で、どこへ行っても（日本の小さな村であれ、中央アジアの地方であれ）、一ヵ月も経たないうちに現地の村人も驚くほどその土地の言葉を上手に話せるようになっていた。「何ヵ国語がわかりますか？」と聞かれた時、本人は大体一四ヵ国から一八ヵ国語ぐらいと認めていたが、彼をよく知る人々は四〇ヵ国語（時にはその方言も）は覚えていたという。

彼は一九一四年に来日した時、長崎県三重村で方言を採集したり、日本語のアクセント分析などの比較研究を行ったりした。一五年には東京帝国大学の理学教室で実験を行っていたが、その際に助手を務めたのが佐久間鼎である。佐久間の著書『日本音声学』（一九二九）はポリワーノフの影響を受けたと佐久間も認めている。

彼は一九一六年一月二九日[33]から日本語科の助教授に任命され二一年まで勤めたが、「一九二一年にモスクワに移りコミンテルンで働き、のちタシケントに転じたが、一九二七年再びモスクワに戻り社会科学研究所において語学の研究に従事した[34]」。

ポリワーノフは一九二〇―三〇年代に研究の成果を数多くの論文にまとめ発表した。その点で彼はロシアにおける日本語音声と日本方言の研究分野の草分けであったといえる。日本でも同じ研究分野の言語学者に刺激を与えた。

ポリワーノフもスターリンによる粛清の最も激しかった時期の一九三八年に逮捕されて、同年一月二五日にスモレンスク市の獄中で死亡したと日本で出版された資料の中に伝えられているが、実際には逮捕されたのは三七年八月一日、射殺されたのが三八年一月二五日である。六三年四月三日が彼の名誉回復の日となった[35]。

彼の著作『日本語研究』は、日本でも村山七郎の編訳で一九七六年に刊行された[36]。彼自身に関する研究は従来ほとんど行われていなかったが、八八年に至ってV・ラルツェフによる彼の伝記が発表された。

こうしてスターリンによる弾圧時代、〝スパイ〟容疑を理由にペテルブルグ、モスクワ、そしてウラジオストックの各大学でも日本学者のほとんどが姿を消し、日本研究の分野は取り返しのつかぬ大きな損失をこうむった。

一九一六年、ポリワーノフの助教授就任と同時に、もう一人のすぐれた若手の日本学研究者エリセーエフ（С.Г. Елисеев/S.G. Eliseev 一八八九―一九七五）も同じ日本語科の助教授として登場した。彼は一八八九年一月一三日、サンクト・ペテルブルグに生まれた。「生家はエリセーエフ兄弟商会といい、大きな食料品店を経営していた。一八九九年名門のラリンスキー校に入学して古典を学んだ。一九〇〇年の夏休みをパリ郊外ヌイーで過ごした時、パリで開催中の万国博覧会を見学し東洋文化に関心を持つに至ったという。一九〇七年ラリンスキー校を卒業、ベルリン大学に進学した。同大学東洋語学部で日本語および中国語を研究した[37]」。アルパートフ（В.М. Алпатов/V.M. Alpatov）によるとエリセーエフの専攻分野の選択には日露戦争（一九〇四―〇五）も影響を与えたという[38]。

エリセーエフは、ベルリン大学で一年学ぶ間に、ドイツ人のR・ランゲやG・プラントという当時のすぐれた日本語の専門家の指導を受けていた。また日本人の留学生、新村出（言語学者、のちに『広辞苑』の編者）に会ったらしい。一九〇八年帰国したのち、シベリアを経由して来日、東京帝国大学文科大学に入学、夏目漱石とも知り合った。バービンツェフによると、エリセーエフは「一九一二年に東京帝国大学を卒業、文学士となった。日本での大学教育（Higher Education）を受けた最初の西洋人だった[39]」。卒業後も大学院に進んで芭蕉の作品と日本の芸術の研究を続けた。

一九一四年六月、大学院課程を修了して同年夏帰国、一一月に結婚した[40]。一五年サンクト・ペテルブルグ大学の修士試験に合格した後、〝試験的〟な講座『芭蕉とその作品』『日本語文語体の展開』が成功してから日本語科で教え始めた。彼は一六年（アルパートフによると一七年）に妻と共に二年ぶりに来日、数ヵ月滞在した。十月革命の前にロシアに帰国、二〇年まで大学で教えながら『日本文学一覧』を発表した。二〇年に短期間逮捕された後、密出国しフィンランドを経由して翌年パリに着いた。

フランスでは亡命者として生活していた。ギメ博物館などに勤め、この間『赤露の人質日記』（朝日新聞社　一九二一年）を日本語で出版した。二六年国際連盟に勤務、在仏日本大使館の通訳も務めた。二九年パリ日本館の初代館長に就任、翌三〇年にはソルボンヌ大学の講師に就任した。パリ滞在中多数の著作を出版した。三一年フラ

ンスに帰化、三二年ソルボンヌ大学高等研究院正教授に就任、さらにハーバード大学から東洋学部部長として招聘された。三四年ハーバード大学東洋語学部教授兼ハーバード・イエンチン・インスティテュート所長に就任。当時の弟子にE・ライシャーワ教授などがいる。四六年フランス政府からレジオン・ドヌール五等勲章が贈られた。五六年ハーバード・イエンチン・インスティテュート所長を辞任、翌年六月には大学教授をも辞しパリに帰った。六九年二月、日本政府より勲二等瑞宝章が贈られた。七五年四月一三日パリで死去した。[41]

以上にみたように、エリセーエフはフランスと米国における日本学分野の研究の端緒を開いた学者であった。革命と混乱の時代に、セルゲイ・エリセーエフが西側に亡命した結果、日本語科が蒔いた日本学の〝種〟が、ロシアではなくフランスやアメリカで〝花〟を咲かせる結果となり、ロシアにとってはまことに残念というほかはない。

一九一四年に実用東洋語学院、一五年にペトログラード大学を卒業したのはオレスト・プレトネル（Ор.В. Плетнер/Or.V. Pletner 一八九二―一九七〇）とオレグ・プレトネル（Ол.В. Плетнер/Ol.V. Pletner 一八九三―一九二九）の兄弟である。一七年、オレストは外交官補として来日し、ネフスキーなどと日本文化研究に従事した。二二年には外交官生活に終止符を打ち、ダニエル・ジョーンズ教授に音声学の指導をうけるためロンドン大学に留学、二三年に日本に戻り、大阪外国語学校の教師となり、さらに京都大学および天理外国語学校などでも教えた。三五年に紀貫之の『土佐日記』の最初のロシア語訳を発表した。四一年に日本を出国、フランス政府の招きでベトナム（越南）に入り、ハノイ大学でベトナム人に日本語とフランス語を教えた。戦後の一九五〇年再び来日し、大阪外国語学校において音声学、ロシア語発達史、フランス語発達史などを講義した。六八年三月に大阪外国語学校を退職、多年の功績に対し日本政府から勲四等瑞宝章が贈られた。七九年一月に神戸で死去。神戸外国人墓地に眠る。[42] オレグの方は教授としてモスクワの東洋学大学に二二年から二九年まで勤めた。彼の研究領域は、主に明治期の歴史と農民運動の研究などであった。

以上に概観したように、一九一〇年代のペテルブルグ（ペトログラード）大学では、日本語教育だけでなく、日本文学、日本歴史、仏教、神道などの分野の研究の基礎が形成されつつあった。ロシアからソビエト時代にかけて、「日本学」という学問史上に名を残した若い研究者のおかげで、東洋学部は黄金時代を迎えた。歴史的に見れば、日露戦争（一九〇四―〇五）前後、第一次世界大戦（一九一四―一八）、ロシア十月社会主義革命（一九一七）、国内戦争（一九一七―二二）など打ち続く戦乱の渦中にありながらも、ロシア・ソビエトの日本学派は若手知識人によって形成されていった。過酷な時

代ではあったけれども東洋学部の日本語科の教室では、漢文、候文、文語体、古文、平安時代の文学作品から夏目漱石の作品までが研究され、教えられていた。真摯で旺盛な知識欲を持った研究者たちが、日本の仏教、神道、民俗、日本語の文法、方言、音声などの分野においても最初の一歩を着実に踏み出していたのである。

コンラッドの後輩と弟子たち

まず、優れた日本語学者コルパクチ（E.M. Колпакчи/E.M. Kolpakchi 一九〇二―五二）の名が挙げられる。サンクト・ペテルブルグの医者の家庭に生まれた彼女は、ペトログラード（一九一四年〈第一次世界大戦が始まった年〉から一九二四年〈レーニンが死去した年〉までの名称。現サンクト・ペテルブルグ）大学東洋言語学部を二三年に卒業する、コンラッドの指導を受けた学生の一人で、師の薫陶よろしきを得てすぐれた日本語学者になった。日本語科を卒業後、二四年から実用東洋言語学院、東洋学院で日本語を教えた。二八年には日本への六ヵ月の留学を体験した。三〇年に、言語用法（直訳すれば言葉遣い文化）大学の助教授、三六年からレニングラード大学の教授に就任した。三〇年代には先輩のネフスキーとの共著による『日本語会話の基礎』『日本語』を出版したほか、単著『和露漢字字典』『日本語の体系文法』などを刊行した。四六年、「奈良時代の文献に現われる古代日本語」のテーマで博士論文を提出し合格した。当時の日本語科の教育課程に生気を吹き込んだのは、初の女性教授であるコルパクチであった。

コルパクチも反革命者として三八年二月一四日、彼女の師たちと同様に逮捕され、三九年二月一日に釈放されるまでレニングラードの刑務所に投獄されていた。[43] 難病にかかり五〇歳で世を去ったのは、入獄中に健康を損ねていたのかもしれない。没後、『日本語史概論第一巻：形態論・動詞』がモスクワとレニングラードで五六年に刊行された。

コルパクチより二歳年下のナタリア・フェリドマン（Н.И. Фельдман/N.I. Fel'dman 一九〇三―七五）はレニングラード大学社会学部を一九二四年に、実用東洋言語学院を翌二五年に卒業した。三一―三四年、レニングラード哲学・文学・歴史大学の教師を務め、修士論文『日本語における後置詞』（一九四四年）の審査に合格、四五年に助教授に就任した。日本の文学作品の翻訳にも取り組んだ結果、『大和物語』と『平家物語』の両書から部分ロシア訳を出版した。五〇年代から何冊かの和露辞典、漢字辞典などの出版を続け、六〇年には単著『日本語』を刊行した。博士論文『日露辞書学の諸問題』（一九七〇年）により七二年に博士号を取得した。[44]

フェリドマンの同級生の一人はグルースキナ（A.E. Глускина/A.E. Gluskina 一九〇四―九四）である。一九二五年、実用東洋言語学院とレニングラード大学日本語学科を同時に卒業した後、人類・民

俗学博物館極東部の研究員を二五年から三三年まで務めた。その間の二八年に博物館の資料収集のため、八ヵ月間日本へ派遣された。東京滞在中、東京帝国大学で『万葉集』の研究もしていた。数年後、同博物館極東部長に就任、レニングラード東洋大学でも三二年から三八年まで教壇に立った。彼女の研究領域は日本の民俗学、宗教、伝統芝居（劇場）、日本文学などである。一九三〇年代の粛清の最中、三八年から三九年まで逮捕・投獄されていたが、釈放後も変わらず日本研究を続けていた。戦後はモスクワに移り、五〇年までモスクワ東洋大学の教師を務めた。その後、ソ連科学アカデミー付属東洋学研究所の研究員に就任、七二年には『万葉集』の研究と翻訳で博士号を与えられた。[45]

以上に述べた三人の女性研究者には、いま一人同級生がいた。モンゼレル（Г.И. Монзелер/G.I. Monzeler 一九〇〇―五九）はレニングラード大学の文学・言語学部を一九二四年に卒業、三〇年には歴史・言語学部も卒業した。二四年から三一年にかけて人類学・民俗学博物館の極東部長を務めていた。三三年から三八年までレニングラード東洋大学の教師となり、東洋学研究所の研究員でもあった。四一年から五二年までは軍に在籍した。五二年から五九年まで宗教研究所の顧問であった。漢詩と芭蕉の俳句に関心を寄せ、いくつかの翻訳書を出版した。ツマーノフ（Г.Г. Тумаиов/G.G. Tumanov）と共に四四年『日・ロ漢字小辞典』を版行した。[46] 幸運にも彼女は三〇年代の逮捕・投獄の危機を免れた。

このグループにはもう一人の女子学生、クレイツェル（Е.Г. Крейтер/E.G. Kreitser 一九〇四―六一）がいる。大学を卒業してからモスクワの内務人民委員部（省）（ＮＫＶＤ）での通訳・翻訳者の仕事を得た。学生時代コンラッドの指導を受け、若手の日本文学作品の翻訳者と共に、観阿弥清次の『松風』を翻訳し、二六年に出版している。運命の悪戯か、ＮＫＶＤで仕事をしていたにもかかわらずＮＫＶＤによって〝スパイ〟の容疑で逮捕、三八年から四四年一〇月まで投獄されていた。釈放後は日本人捕虜の通訳を務めた。[47]

そのクラスでは、別の級友がさらに悲運にあった。彼はＭ・チェルノフ（М. Чернов/M. Chernov）で、卒業後、日本へ研修のために派遣されたが、帰国してから逮捕、射殺されたといわれる。彼についてはこのような情報しか残されていない。

こうしたことから当時のソ連における日本学という学問を行うことが、どれほど危険性に満ちあふれていたかが理解されるだろう。学生の六人からなるグループのうち四人が弾圧を受け、その中の一人が死刑に処せられた。

コルパクチとフェリドマンの後輩に当たるホロドヴィチ（А.А. Холодович/A.A. Kholodovich 一九〇六―七七）は、レニングラード大学言語・文化学部を一九二六年に卒業、六〇年代まで東洋学部で日本語と一般言語学を教えていた。四〇年から五三年まで日本語科

の主任教授であった。三〇年代の半ばに『竹取物語』をロシア語に見事に翻訳した。三七年『軍事日本語のシンタックス』を刊行した。六一年から七七年までソ連科学アカデミー言語学研究所レニングラード支部で、言語構造上タイポロジー研究グループを主宰した。このグループの研究活動により多くのモノグラフが出版された[48]。

ホロドヴィチがレニングラード大学を卒業した年の翌年、二七年には、マルコヴァ（В.Н.Маркова/V.I. Markova 一九〇七―九五）がレニングラード大学東洋学部（歴史・言語学）に入学した。彼は少年の頃から文学と外国語に興味をもち、母親の推薦で日本語科を選んだ。直ちにコンラッドの講義とセミナーに出席し、三年生の頃、日本から帰国したばかりのネフスキーに出会い、日本語だけでなく日本文化についても多くの知識を得ることができた。三三年に卒業してからは翻訳に没頭した。五〇年代から六〇年代にかけて近松門左衛門、西行、石川啄木、芭蕉のほか多くの昔話などをロシア語に訳して出版した。七五年には清少納言の『枕草子』もロシア語訳で発行した。早くにモスクワに移り、モスクワ東洋学大学に三九年から五四年まで、モスクワ大学付属東洋言語大学では五〇年から五八年まで教師を務めた。五八年からソ連作家同盟のメンバーに選出された[49]。

次にホロドヴィチ（彼は一九二五年から東洋大学にも入学）の同期生であり、マルコヴァの先輩である五人について略述しよう。

ツィン（М.С. Цын/M.S. Tsyn 一九〇三―二〇〇二）は一九二六年卒業、三〇年代初頭にモスクワへ移って、三三年から三七年までモスクワ東洋大学の日本語の教師とＮＫＶＤでの通訳を兼ねていた。三七年、夫の逮捕後に自身も逮捕されて四三年の釈放まで矯正労働収容所にいた。のちにモスクワ東洋学研究所で仕事をしながらＥ・ナヴロンと共に「日本語」の教科書（モスクワ　一九五三年）を出版、『露和大辞典』（モスクワ　一九七〇年）の編纂にも参加した業績により七二年、他の共著者と共にレーニン賞を与えられた[50]。

インメルマーン（Г.Г. Иммерман/G.G. Immerman 一九〇六―八二）は一九二七年に大学を卒業後、三五年までレニングラード東洋学大学で日本語教師を務め、三六年から東洋学研究所日本研究課長付秘書としてコンラッドの指導を受けて一九世紀の日本史に関する資料を研究した。三八年、夫の逮捕後に自身も逮捕され、一〇年間マガダン州の矯正労働収容所で過ごし、五五年までハバロフスク州から出ることを禁止され、そこに住み続けなければならなかった。釈放後レニングラードに戻り、翻訳の仕事に集中して谷崎潤一郎、田山花袋、徳永直、佐多稲子などの作品のロシア語訳を出版した[51]。

Ｍ・Ｓ・ツィンによると、彼女の同級生の中で親友だったのは、上述したコンラッドの師であったポズドネーエフの娘のポズドネーエヴァ（В.Д. Поздняева/V.D. Pozdneeva、結婚後Плотникова/Plotnikova 一九〇六―四三）であったという（http//www.japantoday.

ru/arch/jurnal/0012/15.shtml：3／5頁参照）。彼女は大学卒業後、大学院に推薦入学、「徳川時代における農民運動」を研究テーマとした。まもなくモスクワにあった、いわゆる「赤博士学院」の歴史学部から招請されその教師になった。のちにフルンゼ記念アカデミー、軍事東洋大学にも勤めた。レーニン記念公衆図書館原稿部にある、桂川甫周の『北槎聞略』に基づいた『おろしや国酔夢譚』の写本を発見したという。それは後になってコンスタンチノフ（B.M. Константинов/V.M. Konstantinov 一九六三―六七）の研究テーマになった。（『北槎聞略』のロシア語訳はコンスタンチノフのコメントを入れて、七八年にモスクワで出版された。）三七年から彼女の人生にも苦痛や不幸が重なった。その年父親D・M・ポズドネーエフが逮捕され死刑に処され、夫も三八年に禁固刑を言い渡された。入院したり、住まいを奪われたり、失職したりの困難な生活が続いた。戦争前夜でもあり軍事外国語大学で教鞭を執らされた。戦中、その大学とともに疎開したが、糖尿病にかかりモスクワへ早めに戻ることができたものの、四三年、二人の子供を残して三七歳の若さで亡くなった。

同じグループのもう一人の女子学生はナヴロン（E.Л. Наврон-Войтинская/E.L. Navron-Voitinskaya 一九〇六―?）である。一九二〇年代から三〇年代にかけて、在日ソ連大使館、ソ連通商代表部での仕事を体験した。日本語の文法を研究して『日本語における動詞』のテーマで準博士号を一九四六年に受け、四八年に助教授に就任した。モスクワ東洋大学の教師、日本語科科長（三〇―四〇年代）、国際関係大学の日本語、朝鮮語、インドネシア語科長を務め、五三年にはツィンなどとの共著による「日本語の教科書」をモスクワで出版した。

このグループには一六歳になったばかりのネムゼル（Л.А.Немзер/L.A. Nemzer）も入っていた。いま手元に彼についての詳しい資料がないが、一九五〇年代から八〇年代にかけてN・A・スィロミャトニコフなどと共に、和露、露和辞典の編纂に力を尽くした。

以上にあげた研究者の名簿に、さらにフィンクとマカロフの名を加える必要があろう。ツィンの思い出によると、二人とも人生の盛りの時期の一九三七年、獄中でNKVDによって射殺された。

一九三三年からウラジオストック出身の女性教官ペトローワ（О.П. Петрова/O.P. Petrova 一九〇〇―九三）が日本語科で教え始めた。彼女はイルクーツク（東シベリア、ロシア中部の同名の州の州都でバイカル湖の南西、アンガラ川のほとりにあり、一七世紀に建設された東シベリアの政治・経済・文化の中心地）で軍人の家庭に生まれた。二五年にイルクーツク大学社会学部を卒業し、三〇年から三二年まで極東大学日本語科の教師を務め、三六年には極東大学の東洋学部付属技能向上学院も卒業した。三七年から四二年までレニングラード哲学・文学・歴史大学ならびにレニングラード国立大学で教鞭をとり、五三年以降、その日本語科の主任を務めた。四二年から東洋学

研究所レニングラード支部の研究員にも就任した。四七年には「日本語の海軍用語の歴史的・語彙的分析」の修士論文の審査に合格した。四巻からなる共著『日本の原稿、写本、古本の記述』を出版している。[52]

第二次世界大戦直前の一九三九年に日本語科を卒業したのは、ピヌス（E.M. Пинус/E.M. Pinus 一九一四―八四）である。彼女はコンラッド、ネフスキー、コルパクチ、ホロドヴィチ等の弟子で、戦後は長年にわたって日本語科に勤め、井原西鶴、徳富蘆花、『古事記』（上巻）の翻訳に取り組むと共に、博士号を取得して日本語科長として八〇年代の初めまで活躍した。このピヌス教授のもとで筆者の先輩に当たる五〇―六〇年代の日本語学科の卒業生も、七〇年代の筆者と同世代の学生たちも、日本の古典文学や文学史に関する豊かな知識を身に付けることができた。

ピヌスの同級生イオッフェ（И.Л. Иоффе/I.L. Ioffe）もコンラッドの教えを受けつつも、ペトロヴァとホロドヴィチの講義にも参加していた。一九三八年、五年生の頃〝日本のスパイ〟容疑で逮捕され極東にあった労働収容所に送られた。四二年に釈放されたがレニングラードには戻らず、モスクワ東洋学大学を四四年に卒業した。その後は主に日本文学史に取り組んで、著名な日本学研究者・翻訳者になった。[53]

ゴレグリャード（В.Н. Горегляд/V.N. Goreglyad 一九三二―二〇〇二）は一九五六年にレニングラード国立大学を卒業して科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部の研究員に就任した。七四年、日本仏教の基礎に関する講義を六〇年ぶりに日本語科で再開した。『徒然草』の翻訳と解説をテーマにした論文を提出して修士の学位を得た。七五年に日本文学博士号を与えられ、同年から東洋学部日本語科の教授になり、八二年には日本語科長に任命された。同時にロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部極東部長にも就任した。日本からは八六年に山片蟠桃賞を受賞、九七年には旭日章を受章した。

ゴレグリャードの主な著書・翻訳書は次の通りである。『兼好法師著「徒然草」』序、ロシア語翻訳、解説（モスクワ　一九七〇年）、『一〇―一三世紀日本文学における日記・随筆』（モスクワ　一九七五年）、『紀貫之』（モスクワ　一九八三年）、『八―一六世紀日本文学史』（サンクト・ペテルブルグ東洋学センター　一九九七年）、『かげろう日記』序、翻訳、解説（サンクト・ペテルブルグ東洋学センター　一九九四年）、『保元物語』序、ロシア語翻訳、解説（一九九九年）など。彼の日本学、日本研究への貢献はいくら高く評価してもしすぎることはない。[54][55]

同年代で戦後日本語科を卒業した三人が、日本学研究課程に加わった。ブガーェワ（Д.П. Бугаева/D.P. Bugaeva 一九二五―二〇〇〇）は日本学入門、日本思想史、露文和訳、歴史物語を、バービンツェ

フ（A.A. Бабинцев/A.A. Babintsev 一九二〇―八三）は日本語文法、発音入門、日本語文法基礎とテキストを、マクシーモワ（Г.Н. Максимова/G.N. Maksimova 一九二七―　）は現代日本文学史、日本語会話、新聞雑誌の日本語を教えていた。また、彼らの先輩に当たるゼーニナ（Л.В. Зенина/L.V. Zenina 一九二〇―　）は日本地理、日本民族学、日本史を教え、一九五〇年に日本語科を卒業した日本古代史の専門家、ヴォロビヨーフ（М.В. Воробьев/M.V. Vorob'yov 一九二二―九五）も一時期、日本文化史の特集講座を開講していた。科学アカデミー東洋学研究所レニングラード（ペテルブルグ）支部の研究員イヴァノーワ（Г.Д. Иванова/G.D. Ivanova 一九二七―九九）は現代文学セミナーを担当した。国立エルミタージュ美術館の学芸員ダシキエーヴィチ（В. Дашкевич/V. Dashkevich 一九三二年―）はエルミタージュ所蔵の日本コレクションを基礎に日本芸術史の特集講座を約一〇年間続けた。現在はアメリカに移住している。

戦後から今日まで、サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部日本語科は、数多くのヤポニスト（日本学者）を輩出しているが、彼らはロシア国内では当然のことで、元ソ連邦の各共和国、外国ではブルガリア、ドイツ、ポーランド、モンゴル、ベトナム、チェコ、スロヴァキア、フィンランド、アメリカ、イスラエル、スイス、エストニア、ラトヴィア、リトアニアなどの世界各国の日本研究、日本語教育のさまざまな分野で活躍している。彼らの名前や専門についての詳細な紹介は省略するが、日本の事情について簡単に触れておくと、北海道から九州まで、ここ一〇年間に一五あまりの著名な大学で、わが日本語科の卒業生が活躍している。教師だけでなく、在学中の留学生や卒業生の研修生の人数も最近はとくに増えつつあり、現在、彼らの人数は一五人から二〇人に及ぶと思われる。

二〇〇三年、創立以来一〇五周年を迎えた日本語科は今、日本人スタッフを含めて一〇人の教官を擁している。学生数は九〇年代末から圧倒的に増え続けている。筆者の学生時代、五年教育課程では、一学年の人数の少ない時は五、六人、多い時で一三人（合計四〇―五〇人）に対して、今年（二〇〇五年）の九月から勉強を始めた一年生から修士課程の学生や大学院生までの人数を含めると一三〇人以上にも及ぶことになる。このうち五、六人は日本で留学中である。学生数はひところに比べると二倍以上にもなっている。各学年の学生の論文のテーマも多岐にわたっている。『万葉集』から村上春樹まで、徳川時代の歴史から明治、大正、昭和期の歴史までである。言語学の研究の場合も、文語体から現代日本の若者ことばまでも対象となる。

戦後のソ連で、日本語教育を行う大学がモスクワとウラジオストックを入れても五ヵ所しかなかった状況と異なり、ペテルブルグだけでも現在、東洋学部の日本語科の他に、教育大学、文化大学、私立東洋大学等で日本語が教えられている。初等教育の段階でも小学

校二年から第一外国語として日本語をカリキュラムに入れる学校が五校もある。一九九〇年から日本語コースを開始した第八三号学校（生徒数約一五〇人）を始めとして、他の学校の生徒たちも含めるとおそらく二五〇人を超えているだろう。ペテルブルグにある日本センターでもここ数年間、毎年一五〇人ほどが日本語を学んでいる。

一〇年程前の統計によると、全ロシア連邦において日本語教育を行う大学・一般の学校は二六ヵ所、小・中・高等学校は三〇ヵ所近くあった。現在はもっと増えていることだろう。

五年前に筆者は「ロシア高等教育日本語教師沖縄スタディープログラム」に国際交流基金日本語国際センターの招きで参加したことがある。その時、全ロシアから四五人が北浦和に集まった。このプログラムの参加者名簿を見ると地理的に言えば、西はサンクト・ペテルブルグから、東はカムチャツカ、サハリンまでの教師たちの代表の集まりであった。参加者が所属する主な大学のリストをあげよう。一、アジア・アフリカ諸国大学（モスクワ）、二、モスクワ国立言語大学、三、モスクワビジネス大学、四、ロシア科学アカデミー東洋研究所付属東洋大学、五、ロシア国立人文大学（モスクワ）、六、モスクワ国立国際関係大学、七、「ガウデアムス」外国語大学、八、モスクワ消費者協同組合大学、九、サンクト・ペテルブルグ国立大学、一〇、サンクト・ペテルブルグ国立文化芸術大学、一一、東洋大学（サンクト・ペテルブルグ）、一二、ゲルツェン国立教育大学、一三、シベリア国際関係大学（ノヴォシビルスク）、一四、ノヴォシビルスク国立大学、一五、ノヴォシビルスク国立教育大学、一六、シベリア国立測地学アカデミー（ノヴォシビルスク）、一七、シベリア独立大学（ノヴォシビルスク）、一八、チェリャビンスク国立大学、一九、トムスク技術大学、二〇、国立クラスノヤルスク総合大学、二一、国立ピャチゴルスク言語大学、二二、ウラジオストック国立経済サービス大学、二三、極東国立海洋アカデミー（ウラジオストック）、二四、極東国立工科大学付属東洋学大学（ウラジオストック）、二五、極東国立総合大学付属東洋学大学（ウラジオストック）、二六、イルクーツク国立経済アカデミー（現バイカル国立経済法律大学）、二七、イルクーツク国立言語大学、二八、カムチャツカ教育大学、二九、サハリン総合大学付属経済東洋学大学、三〇、極東外国語大学（ハバロフスク）。

もとよりこのリストは一部分でしかない。おそらく教師の数が何十倍にもなるとすれば、日本語学習者の数は何百倍にもなるだろう。

残念ながら現在、全ロシアにおける日本語学習・日本研究の実態を統計的にも内容的にも正確に把握して分析できる状況にはない。とりあえずはソ連の終焉後、日本語学習・日本研究の熱は急激に高まってきているとしか指摘できない。もしかすると、ロシアの日本語学習者・日本研究者のデータは、それが何万人にも上る韓国、オーストラリア、アメリカや西ヨーロッパ諸国の数字に匹敵するか、

それを超えるぐらいになるかもしれない。むろん何事も数が多ければよいというものでもない。「量」の確保と同時に、「質」の向上への不断の努力も今後の課題となろう。

時代の流れと共にソ連が崩壊してロシアも自由な国になり、人々の生活、考え方、ものの見方や価値観が変わりつつある。そしてロシアにおける日本に対しての関心や「あこがれ」は止むどころか高まる一方だ。筆者としても微力ではあるが、先人研究者たちの貴重な経験と成果を活用しながら、新進気鋭の日本学者を育てていくつもりである。二〇〇五年二月二八日、大学教授会において筆者は日本語科長に推挙された。同僚、後輩と共に、サンクト・ペテルブルグにおける日本研究の充実・発展のために力を尽くしていきたいと願っている。

注

（1）中村新太郎著『日本人とロシア人』一一頁、大月書店、一九七八年。
（2）村山七郎著『漂流民の言語』五頁、吉川弘文館、一九五六年。
（3）V・N・ゴレグリャード著『鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち』五頁、（第一二三回日文研フォーラム）国際日本文化研究センター、二〇〇一年。
（4）前掲（1）二四頁。
（5）前掲（1）二四頁。
（6）前掲（3）八頁。
（7）前掲（3）八頁。
（8）秋月俊幸著「ロシアに漂流した日本人たち」北海道日ソ友好文化会館編『日本とロシア―その人物交流の足跡』（ロシアの文化紹介シリーズ二〇）一一頁、一九八九年。
（9）前掲（3）一八頁。
（10）日本ロシア文学会編『日本人とロシア語　ロシア語教育の歴史』二六頁、ナウカ、二〇〇〇年。
（11）『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年。
（12）前掲（10）二六頁。
（13）Бабищев А.А., Из истории русского японоведения//Японская филология.М., 1968. p. 125.
（14）前掲（13）一二五頁。
（15）前掲（13）一二〇頁。
（16）前掲（11）九九頁。
（17）前掲（13）一二六頁。
（18）前掲（11）七〇九頁。
（19）桜井良平著『ペテルブルグの日本人教師　黒野義文』『窓』八号、三二頁、ナウカ、一九七四年。
（20）前掲（19）三一頁。
（21）前掲（19）三四頁。
（22）前掲（13）一二八頁。
（23）Japan Bibliographical ENCYCLOPEDIA & Who is who. The

Rengo Press Limited. Printed in Japan. 一〇四―一〇五頁、聯合プレス社、一九五八年。

(24) Милибанд С.Д.Биобиблиографический словарь советских востоковедов. М., 1977. pp. 304-305.

(25) Громковская Л.Л.,Кычанов Е.И. Николай Александрович Невский. М., 1978. p. 12.

(26) 加藤九祚著『東洋学者・日本学者ニコライ・ネフスキーの生涯』（「ロシアの文化」紹介シリーズ二〇）九六―九七頁、北海道日ソ友好文化会館一九八九年。

(27) 武内博編著『来日西洋人名事典』二四三頁、日外アソシエーツ、一九九五年。

(28) 前掲（26）九九頁。

(29) 前掲（26）一〇一―一〇二頁。

(30) 前掲（10）一〇九頁。

(31) 前掲（27）二八四頁。

(32) Невская Е.Н. О родителях//Петербургское Востоковедение, вып.8. p. 530.

(33) 前掲（27）四四五頁にある日付は間違い。

(34) 前掲（27）四四五頁。

(35) Васильков Я.В., Сорокина М.Ю. Люди и судьбы.Биобиблиографический словарь востоковедов-жертв политического террора в советский период (1917-1991), СПб. : Петербургское Востоковедение, 2003. p. 307.

(36) E・D・ポリワーノフ著、村山七郎編訳『日本語研究』弘文堂、一九七六年。

(37) 前掲（27）六一頁。

(38) Алпатов В.М. Сергей Григорьевич Елисеев//С.Г.Елисеев и Мировое Японоведение. М., 2000. p. 12.

(39) 前掲（13）一三三頁。

(40) 前掲（27）六頁。

(41) 前掲（27）六一頁。

(42) 前掲（27）三九九頁。

(43) 前掲（35）二一〇―二一一頁。

(44) 前掲（24）五七二―五七三頁。

(45) 前掲（24）一四一頁。

(46) 前掲（24）三六五―三六六頁。

(47) 前掲（35）二二二頁。

(48) 前掲（24）五八七頁。

(49) 前掲（24）七一六頁。

(50) 前掲（35）四〇六頁。

(51) 前掲（35）一八〇―一八一頁。

(52) 前掲（24）四二九―四三〇頁。

(53) 前掲（35）一八〇頁。

(54) 前掲（3）発表者紹介頁。

(55) Рыбин В.В. Памяти В.Н. ГОРЕГЛЯДА//Вестник Санкт-Петербургского Университета. Сер. 2, вып.2. СпбУ, 2003. pp. 132-134.